

# feel TEIKYO ft

あなたにつながる帝京大学 撮影・加瀬健太郎

病気のときに頼りになる  
薬剤師の視点ができるまで

「血圧と脈拍は異常なし」「呼吸音に雑音があるから、肺に炎症が起こっている可能性あり」「治療薬による副作用は考えられないか」。一体の人体を取り囲んで、学生たちのディスカッションが続きます。ここは板橋にある帝京大学薬学部の教室のひとつ。薬学部の学生による実務実習の最中です。実習の目的は、最近の医療現場で薬剤師が扱う分野として必要とされてきた「副作用の早期発見」。このモデル人形は、薬の副作用で引き起こされるさまざまな症例がインプットされており、呼吸音や脈拍、瞳孔の開き具合などをリアルに再現できるハイテク機器なのです。学生たちは、薬の処方せんとモデル人形の症状を合わせてチェックし、薬の影響で何が起きているのか、徹底的に話し合います。「この実習で大切なのは、問題解決型の思考を育むということ。従来の知識つめ込み型の勉強とは違い、知識をどう役立てるのか、その方法を学びます。少人数でいろいろな角度から意見を出し合い、全員でひとつの答えを出すという訓練ですね」。そう話してくれたのは薬学部の丸山桂司先生。この授業は、2006年度より薬学部が4年制から6年制に変わったことに伴い、組み込まれました。6年制化されたことで、卒業後に薬剤師として求められる仕事の範囲や、実際に身につくスキルも大きく変化しました。例えば、これまで薬局内で医師の指示により薬を調剤することに特化していたのに対し、在宅医療の現場で、医師の往診後、薬剤師が定期的に患者宅にうかがい、症状の変化を聞いて薬の管理を行うことが可能になるなど、薬剤師の専門性を患者に還元する場がどんどん増えているのです。

実習の後半、学生からこんな言葉がありました。「薬剤師は、薬という化学物質の成分や働きを研究しているので、どこか科学的な目線が常にあると思うんです。だから、医師とはまた違った角度から、患者の症状に気づくことができる。さまざまな視点から安全性を高めることこそ、チーム医療の強み。その意味でも、自分の頭で考えて自分の意見を言う、この実習経験はとても重要だと思います」。医療現場では、ごく初期の副作用など、気づいているのは自分だけという状況も珍しくありません。そんなときに責任をもって意見を言える医療人を育てたい。チーム医療が重視される今だからこそ、薬のプロとしての視点が患者を守るのです。



帝京大学 本部大学PR推進室  
TEL.03-3964-4162  
〒173-8605 東京都板橋区加賀2-11-1



帝京大学をもっと感じるマガジンをお届けします  
帝京大学のあれこれを充実のコンテンツと心地よい写真で紹介する冊子「feel TEIKYO」を配布中。  
請求先→ [post@med.teikyo-u.ac.jp](mailto:post@med.teikyo-u.ac.jp) (本部大学PR推進室)